

廈門語と日本語のアクセントに関する一考察 —廈門語話者が日本語アクセントを習得する立場から—

朱 新 建

目次

- 0. はじめに
- 1. 問題提起と問題の所在
- 2. 廈門語のアクセント
- 3. 日本語のアクセント
- 4. 日本語のアクセントの習得
- 5. おわりに
- ・主要参考文献・

羅常培, 1956, 「廈門音系」(科学出版社)

董同和, 1957, 「廈門方言の音韻」(中央研究院歷史研究所集刊)

趙元任, 1980, 「語言問題」(商務印書館)

詹伯慧, 1981, 「現代漢語方言」(湖北人民出版社)

金田一春彦監修・秋永一枝編, 1981, 「明解日本語アクセント辞典」(三省堂)

小森法孝, 1987, 「日本語アクセント教室」(新水社)

今田滋子, 1989, 「教師用日本語教育ハンドブック⑥発音」(国際交流基金)

0. はじめに

本稿の目的は、廈門語話者が日本語アクセントを習得する際にみられる問題点を分析し、廈門語のアクセントと日本語のアクセントに関する先行研究の成果を踏まえて、同じピッチアクセントである廈門語のアクセントと日本語のアクセントの相違点を明らかにすることと、廈門語話者の日本語のアクセントの習得に役立てようとするところにある。ここで言う「廈門語のアクセント」とは廈門語の「声調」のことであるが、便宜上「廈門語のアクセント」と呼ぶことにする。なお、日本語アクセントとは東京語を主体とする共通語のアクセントを指す。

インフォーマントは厦門市出身の留学生の陳さん（名古屋商科大学在学中，1993年現在），同じく厦門市出身の留学生の曾さん（神奈川大学在学中，1993年現在）と名古屋大学客員研究員の紀さん（1993年6月現在）三氏にご協力いただいた。被験資料はインフォーマントの日本語スピーチ（1991年）の録音テープと朱新建1990を用いた。

1. 問題提起と問題の所在

現代中国語（本稿で言う中国語は北京方言を音声面のベースとしている中国における民族共通語のことで，いわゆる「普通話」を指す）のアクセント，いわゆる「声調」には四つのタイプがあり，四声と呼ぶが，中国語厦門方言（本稿では厦門語と呼ぶ）の声調には七つのタイプがあり，七声と呼ぶ。したがって，厦門語話者はアクセントに敏感で日本語のアクセントの習得は調類が四つである北京語話者よりも有利であるものの，次に述べるように中国語話者に共通にみられる問題点もあると同時に，厦門語話者に特有の問題点も見られる。

なお，以下に挙げる誤用例はインフォーマントの日本語スピーチの録音から取ったものであり，便宜上，片仮名で表記し，（ ）にその語の漢字を付した。アクセントの表記は秋永1981によった。

1.1. 単語レベルの問題点

日本語のアクセントは秋永1958「アクセント習得法則」によると，品詞別に百条もの法則がある。ここでは「アクセント習得法則」をふまえながら，品詞の分類を考えずに厦門語話者の日本語アクセントの問題点はどこにあるかを被験資料を分析しながら見ていくこととする。

単語レベルでは，一拍語は本稿での分析の対象から除外されるので，二拍語以上の単語についてアクセントの問題点を分析していく。

二拍語 平板型→頭高型

イ¹ル（居る） イ¹ス（椅子）

三拍語 平板型→頭高型

ギ¹ンシ（禁止） キ¹ョウジュ（教授） カ¹ンジ（漢字） フ¹ウジ（掃除）

平板型→中高型

チ¹ョギン（貯金） ゴ¹カイ（誤解） ヨ¹ギン（預金） ホ¹シヨウ（保証）

頭高型→中高型

ヤ¹チン（家賃） イ¹ゼン（以前）

四拍語 平板型→中高型

ホ¹ントウ（本当） ハイ¹ゲイ（背景） ベ¹ンキョウ（勉強） ガ¹クセイ（学生）

頭高型→中高型

ビン²ボウ (貧乏) チュウ³ゴク (中国) ガン¹ネン (元年) テン¹リョ¹ク (電力)
 五拍以上の語 スウ¹ジカン (数時間) リュウ¹ガクセイ (留学生) ホシ¹ョウギン (保証金)
 ニュウ¹ガクギン (入学金)

上記の誤用例を見るかぎり、インフォーマントは例外なく、日本語のアクセントを変えて後ろから二拍目までは高く、最後の拍は下がるように発音している。すなわち後ろから二拍目にアクセント核(上野1989)を置く、というパターンである。三拍語の平板型→頭高型の語は、後ろから二拍目は特殊拍であるためアクセント核が前にずれるように発音している。このような現象は特に二字漢語の四拍語に数多く見られ、また平板型の語を中高型のように発音する例が多いことから、平板型のアクセントは厦門語話者にとって困難であることが分かる。これは厦門語話者特有のパターンであり、厦門語のアクセントの干渉によるものと考えられる。

厦門語のアクセントには固有の声調と変調 (Tone Sandhi) とが存在する。単字、すなわち単音節の声調は固有の声調を持っているが、二音節になると、例えば二字熟語の場合、前の音節の声調がかならず変調するのに対し、後の音節は変調せず、語全体のアクセントの重点は後の音節の固有の声調にある。本稿の被験資料を見るかぎり、厦門語の二音節で二字熟語の場合、後の音節は「高降り調」の語が多く、日本語の中高型のアクセントによく似ている。したがって、厦門語話者には同じ二字漢語の日本語の場合、アクセントの核が後の漢字にくるように発音する潜在意識のあることが予測される。本稿においては厦門語話者にみられるこのような現象を「二型パターン」と呼ぶことにする。

1.2. 複合語レベルの問題点

ここで言う複合語とは二つ以上の語が結合して一つの語となることを言う。日本語のアクセントは中国語の声調ほど意味を弁別する機能をもたない(新美1989)と言われているが、複合語の場合にアクセントが果たす統語機能は大きい。日本語では、単語でも複合語でもアクセントによって統語され、アクセント核が二ヶ所以上には存在することはない。これは厦門語話者にとっても他の中国語話者にとってもきわめて難しいところである。

漢語+漢語 1

ニチ¹ジョウセイカツ (日常生活) ニホン¹ゴガッコウ (日本語学校)
 ニホン¹セイフ (日本政府) フホウシュウロウ (不法就労)
 ヨビ¹キョウイクキカン (予備教育機関)

上記の誤用例では、日本語では一語であるのに厦門語話者はアクセントの核が二つあるように発音するため、二語のように聞こえる。本稿ではこれを「二核パターン」と呼ぶことにする。

よく使われる bound form の二拍語は例外なく「二型パターン」で、かつ「二核パターン」のように発音されている。このような傾向は厦門語話者だけでなく、中国語話者に共通して見られる。

1.4. まとめ

厦門語話者が日本語のアクセントを習得する上で困難を覚えるのは、その第1に、1. 1. で見てきた「二型パターン」の問題である。これは学習者の厦門語の声調の干渉に起因する。前述のように、厦門語では二字語の場合に、前の語の声調が変調するが、後ろの語が変調せず、語全体のアクセントの重点は後ろの語にある。そして後ろの語は高いところから低いところへ降りる声調の語が多い。厦門語のこのような声調の干渉で、厦門語話者が日本語の二字語を発音する場合、無意識的に後ろの字にアクセントの核を置くように発音してしまう。第2は、1. 2. で見てきた「二核パターン」の問題である。これは学習者が単語固有のアクセントに固執していることと厦門語の声調干渉によるものと考えられる。「二型パターン」と「二核パターン」に共通する問題は平板型のアクセントである。厦門語話者がこれらの日本語アクセントを的確に習得するためには、厦門語のアクセントと日本語のアクセントの相違点を明らかにし、それを基にして適切な指導法が確立されなければならない。

2. 厦門語のアクセント

中国語のアクセント、いわゆる声調とは、「声の高低で字の異同を弁別する調素 (phoneme)」(趙元任1980)である。声の高低の phoneme は中国語においては母音音素と子音音素と並んで意味を弁別する重要な機能を持っている。中国語の声調の調類は方言によって数が異なるが、次に述べるように、厦門語の場合は本調 (Basic Form) 七つと変調 (Sandhi Form) 七つがある。本稿では厦門語の声調の記述と表記については趙元任の「5度説 (趙1948, Mandarin Primer)」に従って述べていく。

2.1. 厦門語の「七声声調」

厦門語の単字固有の調類は七つであり、ここでは「七声」と呼ぶことにする。厦門語の「七声声調」は一般に下記のように記述される。

調類	伝統音韻論※	調値	例 字	音声	拼音字母※
第一声	陰平半高平調	44	東	[tɔŋ 44]	dōng
第二声	陽平中昇り調	24	同	[tɔŋ 24]	dóng

第三声	陰上高降り調	53	董	[tɔŋ 53]	dǒng
第四声	陰去低降り調	21	棟	[tɔŋ 21]	dòng
第五声	陽去低平ら調	22	洞	[tɔŋ 22]	dōng
第六声	陰入中降短促調	32	督	[tɔk 32]	dōk
第七声	陽入半高短促調	4	独	[tɔk 4]	dók

(※「伝統音韻論説」は詹伯慧1981により、「拼音字母」と声調記号は厦門大学1982「普通話閩南方言詞典」による。また、声調調値の表記は趙1948, p 85によった。)

なお、七声の調値については先行研究と筆者の見解とが異なるところもあるので、以下北京語の調値と比較して示しておく。

2.1.1. 第一声：陰平半高平調，調値44。

厦門語の第一声は半高平調であるのに対し、北京語の第一声は高平調で、調値は55である。先行研究においては厦門語の第一声の調値は北京語と同一であり、55とされているものもあるが、筆者の聴覚印象では厦門語の第一声は北京語の第一声よりやや低い44である。

例：	厦門語 (以下同じ)	北京語 (以下同じ)
	猪 [ti 44]	猪 [tzu 55]
	知 [ti 44]	知 [tʃi 55]

2.1.2. 第二声：陽平中昇り調，調値24。

北京語の第二声は低いところから急に上昇する高昇り調であり、調値は35。北京語の第二声に似ているものの、厦門語の第二声は上昇する起点も終点もやや低い。そして上昇する勢いは北京語ほど急ではない。

例：	池 [ti 24]	池 [tʃi 35]
	除 [tu 24]	除 [tʃu 35]

2.1.3. 第三声：陰上高降り調，調値53。

厦門語の第三声は北京語の第四声の高降り調に似ているが、北京語の第四声、調値51のようにいちばん高いところから一気にいちばん低いところまで下がるのではなく、5から3までしか下がらない。また、北京語の第三声、調値214のようなやや低い2から始まり、さらに低い1におさえて徐々に4まで上昇する低降り昇り調は厦門語にはない。

例：	頂 [tiŋ 53]	定 [tiŋ 51]
	体 [t'e 53]	替 [t'i 51]

2.1.4. 第四声：陰去低降り調，調値21。

これは北京語の第三声の前半部に似ていて，低い2から始まり，さらに低い1まで下がる。

例：	志 [tɕi 21]	志 [tɕi 51]
	醉 [tsui 21]	醉 [tsui 51]
	進 [tɕin 21]	進 [tɕin 51]

2.1.5. 第五声：陽去低平ら調，調値22。

これは北京語にはない声調である。

例：	市 [tɕ'i 22]	市 [ɕi 51]
	弟 [ti 22]	弟 [ti 51]

2.1.6. 第六声：陰入中降短促調，調値32。

これは音節末に「p,t,k,ʔ」の閉鎖音がある場合の声調である。北京語にはこのような音節末子音はないため，このような調類もない。

例：	落 [d' ek 32]	落 [luo 51]
	滴 [tiʔ 32]	滴 [ti 55]

2.1.7. 第七声：陽入半高短促調，調値4。

これも音節末に「p,t,k,ʔ」の閉鎖音がある場合の声調である。北京語にはない調類である。

例：	日 [lit 4]	日 [ri 51]
	蝕 [ɕiʔ 4]	蝕 [ɕi 35]
	捏 [ɲ eiʔ 4]	捏 [ɲ ie 55]

以上見てきたように，厦門語の声調は全体的に北京語の声調より低く，各音節の調音時間も短い。

2.2. 厦門語の変調

中国語各方言の声調は，単字，即ち単音節の声調が基本であるが，二音節の場合，単字の声調に変調する現象が見られる。たとえば，北京語の場合の変調は公式にすると次のようになる。なお，北京語の発音表記は「漢語拼音字母」による。

	第三声214＋第三声214	=	第二声24＋第三声214
例：	語yu214＋法fa214	=	語yu24法fa214
	体ti214＋統tong214	=	体ti24統tong214

美 mei214 + 好 hao214 = 美 mei24 好 hao214

このような環境を数式で表わすと、「第三声→第二声／__+第三声」となるが、調値に変えて表わすと次のようになる。

214→24／__+214

調値で分かるように、第三声が変調した後の声調は第二声としたが、実際の調値は第二声の35ではなく、これよりやや低い24である。趙元任1980は、「買 mai24 馬 ma214 と埋 mai35 馬 ma214」は区別がつかないとするが、それは如何にも大まかすぎる。上記の第三声の連続以外には、次のような変調がある。

1) 一 yi: 55→35／__+51 例：一 yi35 万 wan51 一 yi35 共 gong51 一 yi35 旦 dan51

55→51／__+ (55, 35, 214)

例：一 yi51 千 qian55 一 yi51 年 nian35 一 yi51 起 qi214

2) 七 qi: 55→35／__+51 例：七 qi35 万 wan51 七 qi35 個 ge51 八 ba35 個 ge51

3) 八 ba: 55→35／__+51 例：八 ba35 路 lu51

4) 不 bu: 55→35／__+51 例：不 bu35 在 zai51 不 bu35 会 hui51

上記のような変調は轻声の音節が後続する場合でも基本的には生ずるものである。

例：不 bu35 是 shi4 一 yi35 個 ge4

厦門語の変調現象は北京語のそれに比べて多く存在し、助詞や轻声以外の音節はほとんどすべて変調する。すなわち、助詞や轻声以外の音節は、単音節の場合や轻声の前あるいは文の最後にある場合を除いて、例外なく変調する。二音節語を例に挙げると、先行音節の声調はほとんど変調している。しかしながら、これらの変調は極めて規則的であり、厦門語には Tone Sandhi の現象が存在する。したがって、単音節語はそれぞれ基本声調と変調の二類を有していることになる。厦門語の Tone Sandhi 現象は以下に記述する。

2.2.1. 第一声の変調

第一声の陰平半高平調の変調は次のように陰平半高平調44から第五声の陽去低平調22よりやや高い陽去中高平調33に変調する。

1) 第1音節が第一声であり、第2音節も第一声である場合。

秋44+天44=秋33天44 [tɕ' u33ti44] 漳44+州44=漳33州44 [tɕan33ttɕu44]

2) 第1音節が第一声であり、第2音節が第二声である場合。

周44+囲24=周33囲24 [tɕu33wei24] 猪44+頭24=猪33頭24 [ti33t'au24]

3) 第1音節が第一声であり、第2音節が第三声である場合。

真44+水53=真33水53 [tɕin33sui53] 争44+取53=争33取53 [tɕin33ts'u53]

4) 第1音節が第一声であり、第2音節が第四声である場合。

簽44+証21=簽33証21 [tɕ'ɪm33tɕien21] 侵44+占21=侵33占21 [tɕ'ɪm33tɕam21]

5) 第1音節が第一声であり、第2音節が第五声である場合。

招44+待22=招33待22 [tɕau33tai 22] 添44+飯22=添33飯22 [t'ɪ33pən22]

6) 第1音節が第一声であり、第2音節が第六声である場合。

親44+戚32=親33戚32 [tɕ'in33tɕ'iek32]

7) 第1音節が第一声であり、第2音節が第七声である場合。

遮44+日4=遮33日4 [tɕia33lit4]

ただし、第一声に軽声が後続する場合や、第一声が呼気段落或は文末に位置する場合は変調しない。

例： 争44→戦44争44 [tɕian44tɕin44]

鮮44→魚22鮮44 [ɕi22tɕ'ɪ44]

珍44→甘21珍44 [kam21tɕi44]

官44→官44人 [kua44lan]

以上から、第一声の変調は次のように規則的に示すことができる。

1) 44→33/ __ + (44, 24, 53, 21, 22, 32, 4) 又は, 2) 44→33/ __ + (0 と軽声以外)

2.2.2. 第二声の変調

第二声の陽平中昇り調は下記のように調値24から調値33に変調し、第一声の変調と同じ陽去中高平調になる。

例： 鎌21+刀44=鎌33刀44 [liam33tə44] 従24+来24=従33来24 [tɕən33lai24]

量24+米53=量33米53 [ŋ̚ iũ33bi53] 来24+去21=来33去21 [lai33k'ɪ21]

前24+後22=前33後22 [tɕian33ŋ̚äũ22]

饒24+-32環24=饒33-32環24 [d̚ au33tɕit32k'uan24]

ただし、第二声に軽声が後続する場合や第二声が呼気段落或は文末に位置する場合は変調しない。

例： 男24→男24的 [lam24ŋ̚e]

欄21→欄24着 [nũā24tia]

晴24→放44晴24 [h̥ɕ44tɕi 24jā]

錢24→免44錢24 [mē44tɕi 24]

以上から、第二声の変調は次のように規則的に示すことができる。

24→33/ __ + (0 と軽声以外)

2.2.3. 第三声の変調

第三声の陰上高降り調は調値53から調値44に変調する。変調後の調値は第一声の調値と同じ調値になる。すなわち第三声の陰上高降り調53から第一声の陰平中高平調の44に変調する。こ

の場合も第三声に軽声が後続する場合や第三声が呼気段落或は文末に位置する場合は変調しない。

例： 冷53+風44=冷44風44〔liŋ44hɔŋ44〕 枕53+頭24=枕44頭24〔tɕim44t'au24〕
 浅53+水53=浅44水53〔tɕ'ian44tsui53〕 染53+布21=染44布21〔ɲ44p'ɔ21〕
 柳53+樹22=柳44樹22〔liu44tɕ'u22〕 請53+客32=請44客32〔t'ɕiā44k'eʔ32〕

以上から、第三声の変調は下記のように規則的に示すことができる。

53→44／__+（0と軽声以外）

2.2.4. 第四声の変調

第四声の陰去低降り調の変調は調値21から調値32に変調する。これは第六声の陰入中降短促調の32と同じ調値になるが、第六声のような音節末の閉鎖音による短促がなく、普通の長さの声調である。すなわち、第三声の陰上高降り調の調値53よりやや低く調値32の陰上半高降り調である。この場合も第四声に軽声が後続する場合や第四声が呼気段落或は文末に位置する場合は変調しない。以下、第五声、第六声、第七声の場合も同様である。

例： 替21+換44=替32換44〔t'ui32ŋüā44〕 富21+饒24=富32饒24〔Φu32jau24〕
 浸21+水53=浸32水53〔tɕim32tsui53〕 進21+退21=進32退21〔tɕin32t'e21〕
 笑21+話22=笑32話22〔tɕ'ɔ32wei22〕 刺21+客32=刺32客32〔tɕ'i32k'eʔ32〕

以上から、第四声の変調は下記のように規則的に示すことができる。

21→32／__+（0と軽声以外）

2.2.5. 第五声の変調

第五声の陽去低平ら調の変調は調値22から調値21に変調する。すなわち陽去低平ら調22から陰去低降り調21に変調する。

例： 讓22+歩44=讓21歩44〔ɲ iū21pau44〕 贈22+送21=贈21送21〔tɕi21saŋ21〕
 漸22+漸22=漸21漸22〔tɕam21tɕam22〕 尽22+力4=尽21力4〔tɕin21liet4〕

以上から、第五声の変調は下記のように規則的に示すことができる。

22→21／__+（0と軽声以外）

2.2.6. 第六声の変調

第六声の陰入中降短促調の変調は調値32から調値4に変調する。すなわち陰入中降短促調32から陽入半高短促調4に変調する。

例： 力32+氣21=力4氣21〔rat4k'i21〕 結32+晶44=結4晶44〔ket4tɕin44〕

在22室32+女53=在21室4女53 [tsai21ɕieʔ4ru53]

肥24+漬32+漬32=肥33漬4漬32 [bei33tɕiʔ4tɕiʔ32]

以上から、第六声の変調は次のように規則的に示すことができる。

32→4/___+ (0と軽声以外)

2.2.7. 第七声の変調

第七声の陽入半高短促調の変調は調値4から調値21に変調する。これは同じ調値21の第4声陰去低降り調に似てはいるが、音節末には閉鎖音があるため、短く短促に発音する。すなわち陽入半高短促調の4から陰去低降り短促調の21に変調する。

例： 裂4+開44=裂21開44 [liʔ21k'ui44] 日4+頭24=日21頭24 [lit21t'au24]

笠4+子53=笠21子53 [d'ueʔ21a53] 捏4+死21=捏21死21 [ɲiʔ21ɕi21]

落4+雨22=落21雨22 [d'ek21hɔ22]

以上から、第七声の変調は次のように規則的に示すことができる。

4→21/___+ (0と軽声以外)

2.2.8. 七声声調と変調のまとめ

董同和1957は、厦門語の七声声調を「本調」(Basic Form)とし、それに対応するのは「変調」(Sandhi Form)であるとしている。調値と環境の関係を示し、本調と変調を併せて考えると、厦門語の声調は下記のようにまとめることができる。

第一声：〔本調〕陰平半高平調，調値44，環境：44→44/___+ (0と軽声)

〔変調〕陽去中高平調，調値33，環境：44→33/___+ (0と軽声以外)

第二声：〔本調〕陽平中昇り調，調値24，環境：24→24/___+ (0と軽声)

〔変調〕陽去中高平調，調値33，環境：24→33/___+ (0と軽声以外)

第三声：〔本調〕陰上高降り調，調値53，環境：53→53/___+ (0と軽声)

〔変調〕陰平半高平調，調値44，環境：53→44/___+ (0と軽声以外)

第四声：〔本調〕陰去低降り調，調値21，環境：21→21/___+ (0と軽声)

〔変調〕陰上半高降調，調値32，環境：21→32/___+ (0と軽声以外)

第五声：〔本調〕陽去低平ら調，調値22，環境：22→22/___+ (0と軽声)

〔変調〕陰去低降り調，調値21，環境：22→21/___+ (0と軽声以外)

第六声：〔本調〕陰入中降短促調，調値32，環境：32→32/___+ (0と軽声)

〔変調〕陽入半高短促調，調値4，環境：32→4/___+ (0と軽声以外)

第七声：〔本調〕陽入半高短促調，調値4，環境：4→4/___+ (0と軽声)

〔変調〕陰去低降短促調，調値21，環境：4→21／__+（0と轻声以外）

上述のように，厦門語のアクセントは「七声声調」であるとは言うものの，七声声調の「本調」のほかに，それぞれ「変調」があり，あわせて十四声あると見ることができる。しかし，第一声と第二声の変調，第三の変調と第一声の本調，第五声の変調と第四声の本調及び第六声の変調と第七声の本調はそれぞれ同一の調類であることによって厦門語の調類は以下のように十声とすることができる。

厦門語の調類

- 第一声：陰平半高平調，調値44，第三声の変調。
- 第二声：陽平中昇り調，調値24，
- 第三声：陰上高降り調，調値53，
- 第四声：陰去低降り調，調値21，第五声の変調。
- 第五声：陽去低平ら調，調値22，
- 第六声：陰入中降短促調，調値32，
- 第七声：陽入半高短促調，調値4，第六声の変調。
- 第八声：陽去中高平調，調値33，第一声と第二声の変調。
- 第九声：陰上半高降調，調値32，第四声の変調。
- 第十声：陰去低降短促調，調値21，第七声の変調。

2.3. まとめ

以上のように厦門語のアクセントを見てきたが，厦門語話者が日本語アクセントを習得する立場からみると，厦門語の調類は十有ることによって，厦門語話者は高低の転変形状に敏感であり，アクセントの弁別も容易であることが予想される。これは厦門語話者が日本語のアクセントを習得する際の大きな利点である。一方，厦門語は音節言語であり，一音節は一語であり，それぞれ「本調」と「変調」の2つの調類を有する。これに対し，日本語のアクセントは高低二段階であり，一単語が5，6もの拍によって構成され，アクセントの高低はわずか一ヶ所しかない。従って，厦門語話者にとって日本語のアクセントの習得は一見容易に見える。しかし，厦門語話者は厦門語の干渉によって，日本語を発音する際，多様な変化を反映させようとする傾向があり，日本語のアクセントが単純であるだけにむしろ困難を感じるのである。したがって，前述したように，厦門語話者は，同じ二字漢語の場合では厦門語では例えば，「中国」は〔tiɔŋ33kɔk32〕のように後の音節がさがって降り調のように発音することによって，日本語の「中国」は「チュウゴク」のように発音してしまい，既に指摘した「二型パターン」の問題が生じるのである。また，複合語の場合に「二核パターン」の問題が生じるのも，厦門語の声

調による干渉である。

3. 日本語のアクセント

ここでは、厦門語話者が日本語アクセントを習得するときの「二型パターン」と「二核パターン」の問題点を念頭におき、多音節語のアクセント及び文節のアクセントを中心に見ていく。

3.1. 日本語アクセントの機能

日本語のアクセントは一般的に、「個々の語について、社会的習慣として決まっている相対的な高低の配置」^①とされている。一方、中国語のアクセント、いわゆる声調は、「声の高低で字の異同を弁別する調素 (phoneme)」とされている。比較してみると、日本語も中国語も「高低アクセント」である点で一致するものの、中国語のアクセントは「字の異同を弁別する」ものであるのに対して、日本語にはそのような機能はない。すなわち中国語のアクセントは「弁別的」であるところに特徴があるのである。中国語の「字」は語であり、字の異同を弁別する声調の機能を本稿では「弁語機能」と呼ぶことにする。一方、日本語のアクセントは「高低の配置」とされているが、この「高低の配置」の「配置」については、先行研究では論及されていない。この「高低の配置」こそ、日本語アクセントのもっとも重要な機能であり、則ち「統語機能」である。この「配置」とは Bloomfield 1933 の「Language」の“arrangement”にあたる用語で、他に「配列」の用語もある（安井稔1971を参照）。弁語機能が中国語のアクセントの特徴であるのに対して、統語機能は日本語アクセントのいちばん大きな特徴であり、両言語のアクセントにおけるいちばん大きな相違点となるところである。

日本語のアクセントの特徴は、次のようにまとめられている。

- 1) アクセント核の有無が大事である。 (弁語機能)
- 2) 第一拍目と第二拍目は高さが違う。 (統語機能)
- 3) アクセント核は二ヶ所に別れて存在することはない。 (統語機能)

1)の「アクセント核の有無が大事である」とはすなわち日本語アクセントの、意味を区別する弁語機能である。例えば、「あめ→雨、あめ→飴」；「はし→箸、はし→橋」のような同音異義語の弁別に役に立つ。しかし、日本語のアクセントは「高低」しかなく、アクセントの種類が単純であるので、意味を弁別する機能は十分ではない。例えば、「くも」のアクセントは頭高型しかなく、「雲」も「くも」で、「蜘蛛」も「くも」である。中国語では、「mai214 dong55xi 买 東西 (買物)」と「mai51dong55xi 卖 東西 (物を売る)」のように、アクセントが違うと意味も違うように、アクセントは意味の区別に欠かせないものである。

2)は日本語アクセントの、語や文節の「始まり」を示す統語機能である。

2)の「第一拍目と第二拍目は高さが違う」とは、語や文節の始まりを示す働きである。例えば、「がくせい (学生)」,「にほんおんがく (日本音楽)」のような語では、第一拍の高さと第二拍の高さは異なる。ところが第二拍目がいわゆる特殊拍である場合、第一拍の高さと第二拍の高さはほとんど相違がなくなる。従って、2)は東京アクセントと「低起式」と「高起式」が存在する京阪アクセントと区別するのに有意義であるが、統語機能においてはさほど重要ではない。

3)の「アクセント核は二ヶ所に別れて存在することはない」とは、語や文節の「まとまり」を示す働きである。無論、平板型の語はアクセント核はないのでこのかぎりではないが、起伏式の語はすべてこの規則にあてはまる。

3.2. 日本語のアクセント値

中国語のアクセントの高低は趙元任以来「1, 2, 3, 4, 5」のように「5度」で記述することが多い。中国では、楽譜は五線譜よりも「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, i(ドレミファソラシド)」などのように数字を用いる「簡譜」の方が普及している。無論、中国語のアクセントの「五度」は音楽の音階ほど厳密なものではなく、且つそうである必要もない。本稿も記述の便宜上、「1, 2, 3, 4, 5」の「5度」を採用することとする。この「5度」は「ド, レ, ミ, ファ, ソ」と記述してもよい。例えば「zhong55guo35 (中国)」は「zhongソソguoミソ」である。

日本語のアクセントの高低については、小森1987では、高低感覚を分かりやすく身につけるために、「ドミの理論」を提唱した。本稿では、中国語のアクセントと日本語のアクセントとを比較する角度から日本語のアクセントを見ていく。

日本語のアクセントは聴覚上、低いところは中国語の「1 (ド)」に似ているが、高いところは中国語の「5 (ソ)」まではいかず、「3 (ミ)」ぐらいである。そして日本語の拍は中国語の音節のように長くなく、アクセントも1拍では中国語の1音節の55, 214のような長さもない。日本語のアクセントを高い拍は「3」、低い拍は「1」として、「3」と「1」の長さもそれぞれ一拍に等しい。このようにすると、とりわけ中国語話者にとっては、日本語のアクセントの高低がどれほどのものであるかは中国語のアクセントとの比較と内省ができて理解されやすく、アクセントの長さから日本語の拍感覚もかなり理解されやすくなる。

4拍語を例にあげれば、日本語のアクセント値は下記のように記述することができる。

1) 平板型のアクセント値	1 3 3 3		1 3 3 3
低高高高 (◎型) : 1333	がくせい	(学生)	にほんご (日本語)

ただし、2拍目が特殊拍である場合、1拍目も高くなる。特殊拍はいつも前の拍と1音節になるが、発音時間はほぼ2拍と変わらないので、アクセント値は同じように表記する。

高高低高 : 3333	$\overline{3\ 3\ 3\ 3}$ しんぶん	(新聞)	$\overline{3\ 3\ 3\ 3}$ そうとう	(相当)
2) 頭高型のアクセント値	3 1 1 1		3 1 1 1	
高低低低 : 3111	$\overline{ぞく\ ぞく}$	(～する)	$\overline{ぶつ\ ぶつ}$	(～言う)
ただし、2拍目が特殊拍である場合でも、2拍目はさがる。				
高低低低 : 3111	$\overline{3\ 1\ 1\ 1}$ げんかん	(玄関)	$\overline{3\ 1\ 1\ 1}$ しょうほう	(商法)
3) 中高型のアクセント値	1 3 1 1		1 3 1 1	
低高低低 : 1311	$\overline{し\ ま\ も\ の}$	(綿物)	$\overline{あ\ ざ\ ぎ\ り}$	(朝霧)
低高高低 : 1331	$\overline{1\ 3\ 3\ 1}$ しらじら	(白々)	$\overline{1\ 3\ 3\ 1}$ さむざむ	(寒々)
ただし、2拍目は特殊拍である場合、1拍目も高くなる。				
高高低低 : 3331	$\overline{3\ 3\ 3\ 1}$ しゅうしふ	(終止符)	$\overline{3\ 3\ 3\ 1}$ ざんねん	(残念)
4) 尾高型のアクセント値	1 3 3 3 1		1 3 3 3 1	
低高高高 (低) : 1333	(1) $\overline{お\ と\ う\ と\ は}$	(弟は)	$\overline{い\ も\ う\ と\ が}$	(妹が)

3.3. 多音節語のアクセント

多音節語とは拍数が3拍以上の語を指すこととする。厦門語話者の日本語アクセントの問題点を見ても、拍数が多いほど問題点も多い。以下、拍数の多い語のアクセントがどのような傾向を示しているかを概観し、日本語アクセントの特徴及び習得のポイントを見ていく。

3.3.1. 動詞と形容詞のアクセント

3拍以上の動詞と形容詞のアクセントは基本的に「平板型 (⑩型)」と後ろから2番目にアクセント核のくる「中高型」すなわち「④型」の二種類である。複合動詞や複合形容詞のアクセントもこれに準ずる。3拍動詞の場合、特殊拍のアクセント核が前にずれて頭高型になる例があるが、数が少ない。④型の動詞と形容詞のアクセントは「二型パターン」の厦門語話者にとってはさほど困難ではない。問題は平板型の動詞と平板型の形容詞 (全部で30語前後) の習得であるが、数が少ないので、ほとんど問題とはならない。また、動詞と形容詞の活用のアクセントは非常に規則的である。

例 :	3 3	1 3 3
平板型 (⑩型) : あける	(開ける)	あかい (赤い)

1 3 3 3 いただく	1 3 3 3 おいしい (美味しい)
1 3 3 3 3 あこがれる (憧れる)	1 3 3 3 3 むずかしい (難しい)
1 3 3 3 3 3 あまったれる (甘ったれる)	1 3 3 3 3 3 くすぐったい (搦ったい)
1 3 1 中高型 (②型) : は ¹ る (走る)	1 3 1 あ ¹ い (青い)
1 3 3 1 かし ¹ だす (貸し出す)	1 3 3 1 こま ¹ かい (細かい)
1 3 3 3 1 かき ¹ あげる (書き上げる)	1 3 3 3 1 むし ¹ あつい (蒸し暑い)
1 3 3 3 3 1 かたりあ ¹ かす (語り明かす)	3 3 3 3 3 1 なん ¹ でも ¹ ない (何でもない)
3 1 1 頭高型 (動詞) : と ¹ おる (通る)	3 1 1 も ¹ うす (申す)

形容詞のアクセントは平板型が全部で30語前後、後は全部③型の語で、非常に規則的ではあるが、「アクセントの練習は形容詞から始める」^②のは危険である。それは③型の形容詞は最後の拍は〔i〕でほとんど特殊拍に近く、アクセント核は自然に〔i〕の前まで下がって③型となり、③型に慣れてからは平板型の習得は困難である。

3.3.2. 単純名詞のアクセント

3拍以上の単純名詞と名詞に準ずる語のアクセントは基本的には平板型と後から3拍目まで高い③型の語が多い。4拍語、特に漢語は平板型が多く、半数以上を占める。その次に多いのは③型の語である。厦門語話者の「二型パターン」のような③型アクセントは非常に少なく、地名や人名などのアクセントはほとんど平板型か③型で、③型は特殊拍の語か人名にしかなく、それは極少数である。4拍以上の語は頭高型や尾高型は非常に少なくなり、5拍以上となると平板型もぐっと少なくなって、③型の語が半数以上を占める。平板型の4拍語、特に漢語のアクセントと起伏式の代表型③型の語のアクセントは、日本語アクセントの代表的な特徴であり、習得のポイントでもある。

例 :	1 3 3	3 3 3
平板型 (①型) :	し ¹ ごと (仕事)	ず ¹ っと

	3 3 3 3 しんらい (信頼)		3 3 3 3 せんじつ (先日)
	3 1 1		3 1 1
頭高型 (㊸型) :	あらし (嵐)		しずか (静か)
	1 3 1 1		1 3 1 1
中高型 (㊸型) :	あおもり (青森)		たけうち (竹内)
	1 3 3 1 1		3 3 3 1 1
	ストライキ		だいたい (大都会)
	1 3 1		1 3 1
(㊸型) :	あなた		ななめ (斜め)
	1 3 3 1		1 3 3 1
	こくおう (国王)		とくしま (徳島)
	1 3 3 3 1		1 3 3 3 1
尾高型 :	おとうとは (弟は)		いもうとが (妹が)

3.3.3. 複合名詞のアクセント

複合名詞のアクセントは主として後部によってきまり、中高型のアクセントが中心で、平板型がその次に多い。下記のように全体で4拍以上の語で、後続部分が和語であるか漢語であるかに分けて、複合名詞のアクセントを見ていく。

1) 後続部分が和語の場合

	3 3 3 3 1		1 3 3 3 1
㊸型 :	しんさつび (診察日)		にわかあめ (にわか雨)
	1 3 3 1 1		1 3 3 1 1
㊸型 :	ながらがわ (長良川)		にぎりずし (握り鮓)
	1 3 1 1		1 3 3 3 1 1
	ひあそび (火遊び)		はだかまつり (裸祭り)

上記のように、後続部分が一拍や二拍で頭高型の語がくると、㊸型になるが、そのほかは基本的に㊸型になる。

下記のように、後部に「色、組、側、先」などのような語がきたり、形容詞の語幹がきたりすると平板型になる。動詞と動詞の複合名詞も平板型である。

	1 3 3 3 3 3		1 3 3 3 3
平板型 :	むらさきいろ (紫色)		つとめさき (勤め先)

(㊶型)	1 3 3 3		1 3 3 3	
	ききこみ	(聞き込み)	てみじか	(手短)
2) 後続部分が漢語の場合				
2.1) 一字の場合	1 3 3 1		1 3 3 3 1	
㊶型:	なごやし	(名古屋市)	もりやまく	(守山区)
	3 3 3 1 1		3 3 3 3 1 1	
㊶型:	あいちけん	(愛知県)	ちゅうごくじん	(中国人)
	1 3 3 3		1 3 3 3	
平板型:	にほんご	(日本語)	ちにちは	(知日派)
(㊶型)	1 3 3 3 3		1 3 3 3 3	
	にほんせい	(日本製)	ごぜんちゅう	(午前中)

上記のように、後続部分漢字が一拍の場合は㊶型、二拍の場合は㊶型である。

「語、派、課、科、製、中、性、別、用、的」等の語がくる場合は平板型になる。

2.2) 二字の場合	3 3 3 3 1		1 3 3 3 1	
㊶型:	みんしゅしゅぎ	(民主主義)	むえんぼち	(無縁墓地)
	1 3 3 3 3 1 1		1 3 3 3 1 1	
㊶型:	かぶしきがいしゃ	(株式会社)	じゅけんじごく	(受験地獄)
	1 3 3 3 3 1 1 1		3 3 3 3 3 1 1 1	
㊶型:	そくせいさいばい	(促成栽培)	じんこうしょうめい	(人工照明)

上記のように、後続部分が二字の場合のアクセントは後部の第一拍目まで高い。㊶型の語が多く、㊶型の語は後から3拍目の拍が特殊拍である場合が多いので、アクセントは一拍前にずれて㊶型になったと見てもよい。

以上見てきたように、多音節語のアクセントの傾向は、単純名詞では平板型の語が圧倒的に多く、その次に多いのは㊶型の語である。複合名詞では後部の語の第一拍目まで高い中高型の語が多く、それは規則的な現象である。動詞と形容詞のアクセントの特徴は㊶型が多いことである。したがって、多音節語のアクセントの習得には平板型を中心に高く平らなアクセントの訓練をし、㊶型のアクセントのパターンをしっかりと身につけることがポイントとなる。

3.4. 文節のアクセント

文節のアクセントとは助詞や助動詞が先行する free form の語についての場合のアクセントを言う。「など」のような助詞は平板型の語につくと前の語のアクセントは変化せず、助詞の第一拍まで高く、また、起伏式の語につくときはすべてさがってつく。「ほど」のような助詞

は先行する語が平板型の場合は高く平らに、起伏式の場合はさがってつき、同じように先行する語のアクセントは変化しない。ここでは語のアクセントを変える助詞や助動詞及び「もの、こと、ため、とき、うえ、した、うち、かた」類のアクセントを見ていくこととする。

3.4.1. 語のアクセントを変える助詞と助動詞

1) 「の」

「の」がつくと、名詞の最後の拍が特殊拍で③型の語は平板型に変わる。

例： にほん⁺の⁺せいじ⁺＝にほん⁺の⁺せいじ⁺（日本の政治）
きのう⁺の⁺じけん⁺＝きのう⁺の⁺じけん⁺（昨日の事件）

尾高型の語の後に「の」がくると平板型になる。

例： おとう⁺と⁺ともだち⁺＝おとう⁺と⁺の⁺ともだち⁺（弟の友達）
はな⁺と⁺どくしんぐみ⁺＝はな⁺と⁺の⁺どくしんぐみ⁺（花の独身組）
おとこ⁺と⁺めんつ⁺＝おとこ⁺と⁺の⁺めんつ⁺（男の面子）
おんな⁺と⁺おはこ⁺＝おんな⁺と⁺の⁺おはこ⁺（女の十八番）

2) 「だけ」

「だけ」がつくと、先行する語のアクセントは高く平らになり、全体として平板型になることがある。

例： たねまき⁺＋だけ＝たねまき⁺だけ（種蒔だけ）
へいやぶ⁺＋だけ＝へいやぶ⁺だけ（平野部だけ）
いもうと⁺＋だけ＝いもうと⁺だけ（妹だけ）
ならう⁺＋だけ＝ならう⁺だけ（習うだけ）
ない⁺＋だけ＝ない⁺だけ（無いだけ）
しろい⁺＋だけ＝しろい⁺だけ（白いだけ）

3) 「ばかり」、「ぐらい」、「どころか」

「ばかり、ぐらい、どころか」がつくと、先行する語のアクセントは高く平らに変わり、助詞の第一拍目にアクセント核が来ることがある。

例： ふうけい⁺＋ぐらい＝ふうけい⁺ぐらい（風景ぐらい）
うまい⁺＋どころか＝うまい⁺どころか（旨いどころか）
なやむ⁺＋ばかり＝なやむ⁺ばかり（悩むばかり）

4) 「らしい」

「らしい」がつくと、先行する語のアクセントは高く平らに変化し、「らしい」の2拍目まで高く、全体のアクセントは④型になることがある。

例： $\overline{\text{あめ}} + \text{らしい} = \overline{\text{あめらしい}}$ (雨らしい)
 $\overline{\text{だいじょうぶ}} + \text{らしい} = \overline{\text{だいじょうぶらしい}}$ (大丈夫らしい)
 $\overline{\text{おんな}} + \text{らしい} = \overline{\text{おんならしい}}$ (女らしい)
 $\overline{\text{ふる}} + \text{らしい} = \overline{\text{ふるらしい}}$ (降るらしい)
 $\overline{\text{なおる}} + \text{らしい} = \overline{\text{なおるらしい}}$ (直るらしい)
 $\overline{\text{さむい}} + \text{らしい} = \overline{\text{さむいらしい}}$ (寒いらしい)

5) 「ます」、「ません」、「まい」、「たい」

「ます」、「ません」、「まい」がつくと、すべての動詞のアクセントは高く平らに変わり、③型になる。「たい」は起伏式動詞につくと、全体のアクセントは②型になる。

例： $\overline{\text{みる}} + \text{ます} = \overline{\text{みま}}\text{す}$ (見ます)
 $\overline{\text{よろこぶ}} + \text{ます} = \overline{\text{よろこびま}}\text{す}$ (喜びます)
 $\overline{\text{おもいだす}} + \text{せる} + \text{ません} = \overline{\text{おもいだせま}}\text{せん}$ (思い出せません)
 $\overline{\text{なる}} + \text{まい} = \overline{\text{なるまい}}$ (成るまい)
 $\overline{\text{わかる}} + \text{まい} = \overline{\text{わかるまい}}$ (分かるまい)
 $\overline{\text{くじける}} + \text{まい} = \overline{\text{くじけま}}\text{い}$
 $\overline{\text{のむ}} + \text{たい} = \overline{\text{のみた}}\text{い}$ (飲みたい)
 $\overline{\text{はしる}} + \text{たい} = \overline{\text{はしりた}}\text{い}$ (走りたい)

3.4.2. 「もの、こと、ため、とき、うえ、した、うち、かた」類のアクセント

「もの、こと、ため、とき、うえ、した、うち、かた」のような尾高型語のアクセントは、平板型の名詞や動詞、形容詞につく場合、もとのアクセントを生かし、アクセント核は最後の拍までくる。前が起伏式の語の場合はさがってつく。しかし、厦門語話者はこのような語を一拍目を高く、すなわち頭高型のように発音する。これは厦門語話者だけでなく、中国語話者は2拍語をすべて頭高型のように発音する傾向がある。

3.5. 日本語アクセントの表記

日本語アクセントの表記は和田実1975「アクセント・イントネーション・プロミネンス」(文化庁)の「東京アクセント体系における〈4拍名詞の5つの型〉とその表記法」を後に付する。この表の中には「い」から「れ」まで様々なアクセントの表記を示しているが、それらの表記以外には本稿で使っているように、「低高高高」、「①、②、③、④、⑤」などがある。中国語話者が日本語のアクセントを習得する立場から見れば、日本語のアクセントの特徴を最も反映する表記は表の中の「り」行の表記であり、本稿はこの表記を使うとともに、中国語話者が分かり

やすいように、日本語アクセントの高低を示す「1」「3」を併せて使う。中国では単語だけでなく、会話文や本文も「り」の表記をしている大学の日本語教科書さえある。もし初級の段階で「1」「3」の表記も加えれば、さらに効果的であろう。ただし、3. 2. で述べたように、本稿では頭高型以外の語の表記は、第2拍目が特殊拍である場合は、第1拍も高く表記する。

3.6. まとめ

日本語アクセントの特徴はまずなんと言っても日本語語彙のおよそ半数を占める高い拍が連続する平板型のアクセントである。日本語の音節は「拍」で表現しているようにどの言語よりも短く、かつ一語には短い音節が4つも5つも6つも連続するものがあるにもかかわらず、アクセントはほとんど変化なく拍から拍へと高く平らに続く。日本語の平板型のアクセント、とくに多音節語の場合は、音節ごとにアクセントが変わり、かつ同じ字にアクセントが二通りある厦門語話者にとっては、その習得は至難の業である。次に起伏式語の半数以上を占める③型のアクセントであるが、これは起伏式アクセントの典型的な型である。1拍や2拍の語でも助詞を入れて見ていくと③型が多い。アクセントが高いところから低いところへさがるのは厦門語話者や他の中国語話者にとっては決して難しくはないが、問題はどこからさがるかである。日本語アクセントの上記二つの特徴を中心にアクセントの指導をすれば、比較的容易に解決できるであろう。

4. 日本語のアクセントの習得

アクセントは結局一つひとつ覚えていくしかないと言われるほど難しい問題である。しかしながら、言語における様々な現象には規則性が存在している。アクセントもその例外ではない。それらの規則性はその言語を母語とする話者は言語形成期に自然に習得している。文盲でも母語を話せない人はいないし、音痴でも母語のアクセントの分からない人はいない。しかし、言語形成期が過ぎて、母語と異なる言語を習得しようとする場合、その言語が有する規則を習得していくことが、効率的であることは言うまでもない。日本語のアクセントの習得においてもそれらは例外ではない。

日本語のアクセントの習得は前述した日本語アクセントの特徴を知った上で、平板型と③型を中心に訓練し習得していくのがポイントである。初心者の場合では日本語の発音の習得と同時にアクセントの訓練をすれば効果的である。すなわち日本語アクセントの特徴である平板型と③型を先ず学習者に固定させる。例えば、下記のように「あいうえお」を練習するまさにその時に、平板型と③型のアクセントの練習をすることも一つの方法である。(注：初心者は普

通平仮名を最初に習うので、例は平仮名にした)。下記のようにアクセント値と一緒にアクセントの表記をすれば、厦門語話者にとってその習得は容易である。

1) 平板型の練習

1 3 3 3 3	1 3 3 3 3	1 3 3 3 3	1 3 3 3 3	1 3 3 3 3
あいうえお	いうえおあ	うえおあい	えおあいう	おあいうえ
1 3 3 3 3	1 3 3 3 3	1 3 3 3 3	1 3 3 3 3	1 3 3 3 3
あうえおい	いえおあう	うおあいえ	えあいうお	おいうえあ
1 3 3 3 3	1 3 3 3 3	1 3 3 3 3	1 3 3 3 3	1 3 3 3 3
あえおいう	いおあうえ	うあいえお	えいうおあ	おうえあい

上記の「あいうえお」などをそれぞれ一語としてすらすらと言えるように繰り返し繰り返し練習する。アクセントの高さの説明は厦門語話者に厦門語のアクセントを自覚させ、内省させれば問題にならないはずである。例えば下記の厦門語のアクセントの高さは同一話者である場合に日本語の平板型の高さに似ていて、かつ平板型とほぼ同じような高さが後続する。これは他の中国語方言話者よりも有利な点である。

例：	4444	4444
	戦争(tciam44 tcin44)	振興(tcin44cin44)
	4444	4444
	冷風(liŋ44hɔŋ44)	齒科(k'i44k'e44)

上記二字語の音節の長さも調値で示しているように日本語の4拍とほぼ同じであり、日本語の二字漢語もだいたい4拍である。ただし、これはあくまでも高い音節が続くための練習であって、日本語の実際の高低は高い拍は3ぐらいであり、ほぼ厦門語の「親戚 [tɕ'in33 tɕ'iek32]」の「親33 (変調の調値)」であり、低い拍は1ぐらいで、厦門語の「飯 [pɛŋ22]」よりやや低いと説明し、そして平板型では第一拍が低く、第二拍から高くなると説明しておいて、後は何拍でも高く平らに続けることができるように練習をすることである。学習が進むにつれて語彙が増えてきたら、「東京、大阪学生、外国」のような平板型の二字漢語を中心に練習し、ヒヤリングの練習も同時に行えばより効果的である。平板型の動詞や形容詞も順次与えて練習し、平板型のアクセントに自然に慣れていく。

2) ㊦型の練習

㊦型のアクセントは発声生理学的に言っても平板型より楽である。五十音図の発音を習得し、平板型がある程度定着してから練習するのがよい。例えば「ら行」の発音を練習しながら㊦型を練習する。

例: 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1
 ら¹る³れ³ろ り¹る³れ³ろ る¹れ³ろ³ら れ¹ろ³ら³り ろ¹ら³り³る
 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1
 ら¹る³れ³ろ り¹れ³ろ³ら る¹ろ³ら³り れ¹ら³り³る ろ¹り³る³れ
 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1 1 3 3 1 1
 ら¹れ³ろ³り り¹ろ³ら³る る¹ら³り³れ れ¹ら³り³る ろ¹る³れ³ら

学習が進んだら、例えば会話の中で意識的に「竹内、山中、松下、高橋」のような③型4拍語の日本人の名前を与えて練習する。最初は「先生」などのような③型の語は避ける。「先生」は「せんせい」より「たけうちせんせい（竹内先生）」のように与えたほうがよい。③型がほぼ定着したら「あらし（嵐）」のような頭高型の語を与えて練習する。最後に③型の動詞や形容詞を与える。さらに学習が進んだら、③型とあわせて複合語を与えて練習を進める。

以上、アクセントの習得についてその指導法を述べてきたが、実際の訓練と指導は想像以上に困難であることはいうまでもない。学習者の意欲と効果的な指導が一体となってはじめて、それが実現されるものであることは他言を待つまでもない。

おわりに

本稿は厦門語アクセントと日本語アクセントを分析し、その結果を基に、厦門語話者の日本語アクセントの習得について述べてきたが、日本語のイントネーションやプロミネンス、リズムとポーズなどについてはこれからの研究課題である。そして厦門語話者に対する日本語の音声教育はどうであるべきか、その指導法をどう具体化していくかなどについても、これからの研究課題とする。

・付・ (和田実1975)

東京アクセント体系における〈4拍名詞の5つの型〉とその表記法					
い ろ は に ほ へ と ち り ぬ る を わ か よ た れ	起伏式			平板式	
	頭高型	中高型		尾高型	平板型
	上下下下	下上下下	下上上下	下上上上(下)	下上上上(上)
	●○○○▷	○●○○▷	○●●○▷	○●●●▷	○●●●▷
	フジサン	シラユキ	アオゾラ	イモオト	トモダチ
	フジサン	シラユキ	アオゾラ	イモオト	トモダチ
	フジサン	シラユキ	アオゾラ	イモオト(ガ)	トモダチ(ガ)
	フジサン	シラユキ	アオゾラ	イモオト	トモダチ
	フジサン	シラユキ	アオゾラ	イモオト	トモダチ
	フジサン	シラユキ	アオゾラ	イモオト	トモダチ
	Fu]jisan	shi[ra]yuki	a[ozo]ra	i[mōto]	to[modachi]
	[Fu]jisan	shi[ra]yuki	a[ozo]ra	i[mōto]	tomodachi
	/フ]ジサン/	/シラ]ユキ/	/アオゾ]ラ/	/イモオト] /	/トモダチ/
	/○]○○○/	/○○]○○/	/○○○]○/	/○○○○] /	/○○○○/
	①	②	③	④	⑤
	フ	ラ	ゾ	ト	〇

注：

①金田一春彦1967.8「共通語の発音とアクセント」

(日本放送協会出版「日本語発音アクセント辞典」)

②今田滋子1989.5「教師用日本語教育ハンドブック⑥発音改訂版」p112 (国際交流基金)